



^ 13
2895
1



13
2895
1-4

節亭主人著

畫本
復雙

放家僧談

全四冊

畫工蘆溪



俠骨不須辭
腰間佩

門 八 13
藏 2895
卷 1

校仇
考談

敢以傳後

嘉謀敢以傳後
之所撰之凡
可之云有
終一向傳
高秋素
編以

昭和九年
七月三日
購求

此亦子見之
願子協心
神略跡漸
意剛之生
方勿必念
人亦可以
不以此為
士君子之
思余亦亦
中主之
人者矣
可也
書之
制如
序

文正西宮六

信田國幹

とよのぶらうのぶと
利根十郎信俊



ちののぶらうにらうのぶと
榎野敏太郎直雅

ちののぶらうにらうのぶと
榎野小治郎直之



重本復讐放下僧惣目録

上之卷

- 第一篇 義勝公足高山御狩条
- 二篇 榎野利根と争条 榎野横死条
- 三篇 榎野家民間下条 一閑斎因条
- 四篇 小治郎售条 皎太郎落髮条

中之卷

- 第五篇 小治郎愁歎条 僧与出奔条
- 六篇 小治郎折檻条 頑童習条
- 七篇 染之助身請条 艱難之条
- 八篇 娘都由愛情条 染之助浪速趣条

下之卷

本卷

第九篇 漆之助至五柳菴条 并 棒繪馬条

十篇 漆之助西田本名告条 并 叙術修行条

十一篇 小治郎真雅遭条 并 兄弟放下立出条

未卷

十二篇 刀根十郎凶夢条 并 三嶋詣条

十三篇 植野兄弟復仇条 并 本領安堵条

目錄畢

繪本復讐放下僧上之卷

東都 節亭山人著

第一編 義勝公足高山御狩之条

往昔下野の州植野郡織田比里に、植野左衛門

直家といふものあり。本より氏系正しき武

の家より、代々足利に属せしが、父の頃より軍

学をせりて、法大老および族本の師範を

たひ、是をりて其名一世に冠して、植野左衛門



足高山
御狩

とく誰きぬ者もたなく。衆人乃幣する。盛るれば室にふ足なく所方隅は屋紳はかやう二階三階高樓のあけ。秋を月うげ六賓客を集く軍学をかたり。時して山す細く川に釣ゆる中の中。大岳廣野指はく國と一軍用此る心は中。今もす天下に一大夏あは忠力あは。は錫さんと。獺に是をす。とざら。ハ甚巧。

武士にあは。やまう。又軍術をせ。人。刀根十郎信俊といふ。の同業あり。か。此。憶念。と。う。に。常。快。和。す。あ。り。義勝將軍治世。徒然獸狩。あ。小。高乃山に列卒。入。誌。大名の群集。東。西南。狩立。獲。り。の。多。く。真。を。入。り。

けらおゆー長二間斗もおぼくさ大あ
獸一足追まれ一後に逃のぼりくるが数
多の大名簇下れ中も誰うまを射留
しりのなく終に其ころをそくしあひ
ぬまうれ所義勝公もろにけりや
御覽ありくやとぬんまおぼくめさぬ
が後追侍乃りのり上りる只今逃のぼり
獸ハ數年来星は強一兔と見え侍あり

其ころら耳たぐ一後趾長しく前足短く
そ此早よりしく高に逃のぼり走をえん
誰う射少めがうと俊足もくは邊に義里侍
ア〜兔の下より上へ登るとこハ司李昏官
音とアはと何事ぬくア上りれハ將軍團
しめされきしそあ〜ん容よくも兔に似たり
其のぼり此登と矢もすと趾におよぶは少
のろは侍今ア〜司李昏官音とハ如何

あつるやと御事づひをありき近
後乃りの海いしなるも存ねに彼は
是と軍合々も誰う此いれ知るの
たぐ種々煩ひありき刀根十良御側に
ありき此の事を直筆をとって認る
唐士周の靈王比太子晋とふ人笙を吹せり
るに付く此の事則史記第十五の巻に
ありきと恐らく奏事におよびて

將軍御感料ありき刀根十良が秀才博学拔
群好りと大に賞義ありき。栲野と龍を同
く相互に勤功急なりき。刀根十郎ハもとより淡海邪智の心深きハ
栲野左衛門の業を等うすとす。左衛門の首尾におよぬまに何卒して左
衛門をさふぎけ。夫一人用ひりしと晝夜
を碌とつ終く工夫をめぐりしと思

足高山田孫にゆめり、司李昏宦音の
事と告言し、將軍のおぼくめ、厚く
追く令色、輕口、はり、はく、今
うくハ、桂野ハ、方根ガ、お、ま、勤務
に、お、終、る、バ、方根ハ、お、折、お、ひ
其、隙、を、ら、か、ひ、寄、る、將軍ハ、逸、及
る、色、を、お、り、義、勝、公、疑、惑、深、く、あ、れ、
遂、に、浸、潤、の、非、を、用、ひ、て、榎、野、左、衛、門、と

御退あり、掌て御側、ま、召、出、さ、す、
ハ、桂、野、も、つ、つ、お、り、ひ、め、り、
か、ま、あ、り、カ、根、ガ、諺、ち、り、お、り、
あり、左、衛、門、一、走、り、通、り、け、こ、左、衛、門
ふ、ま、あ、り、質、より、篤、信、な、ま、
あ、り、な、ま、。 柳、下、惠、三、度、退、け、
く、お、り、ひ、め、り、ハ、時、の、な、り、
怒、り、色、も、な、く、あ、り、ガ、察、入、閉、入、乃、世

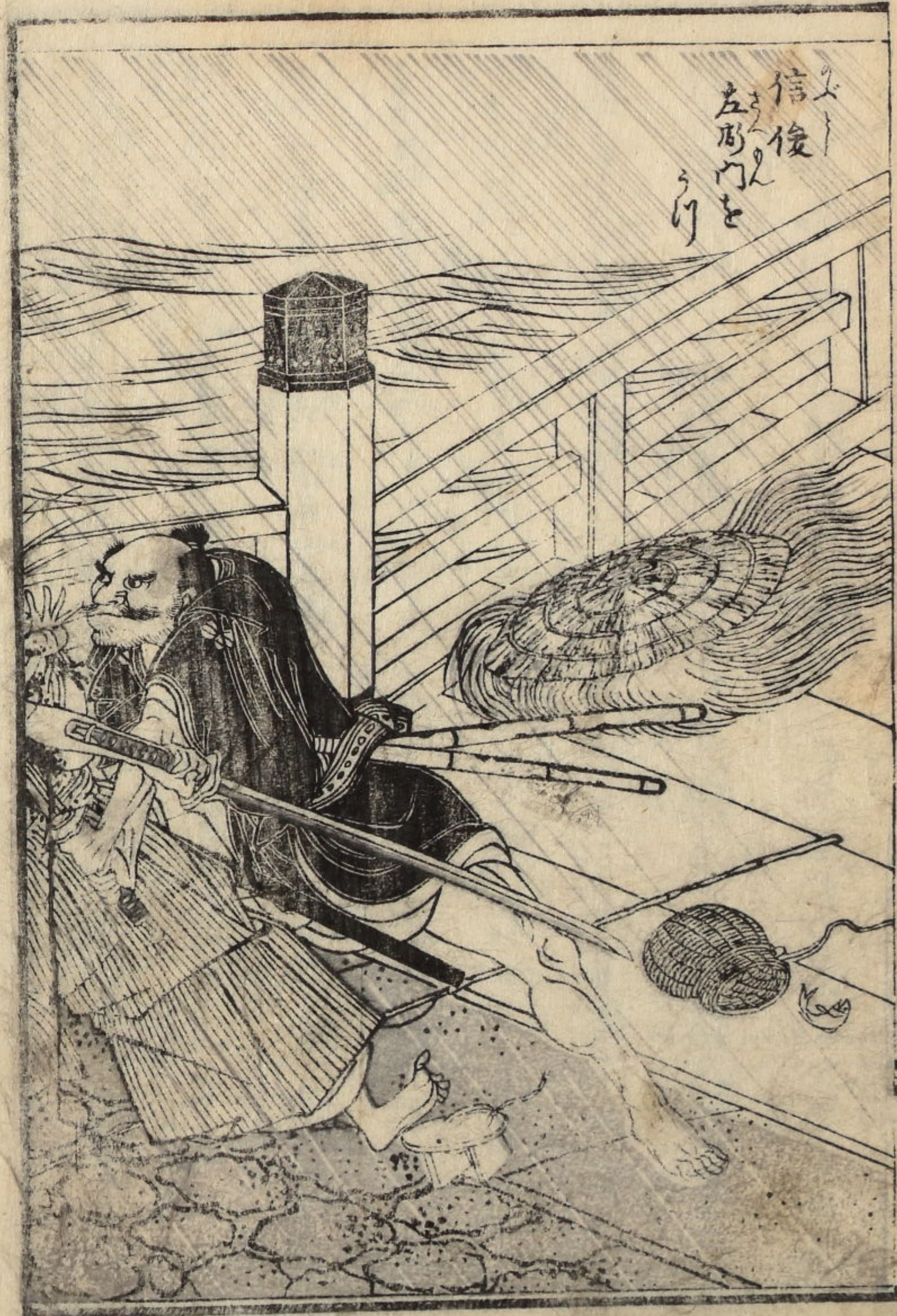
のちしひ誰つとゆへ將軍一カ根が惡くは
迷榎野が人品を養う告上りれハ義徳公又
もや御心こころせく。再度左衛門を召出
カ根十郎はけろに御意けろろれハ
不平のおりいを生じ惡づこハ左衛門が
謀しかりんと匹夫のうらみ一念に巧ハ
中々此等好

二編 榎野カ根と筆隻 核野横死条

嘉吉三年三月二日のちあまが雨ゆへ
風あしく吹すこむよ。生来もすれよハ淋
こころとくは情望左衛門私用ありく。炮燂嶋
こころとくは情望左衛門私用ありく。永代橋には
傘をこむひけく是はまのすぞお橋を
殺生を好くけとバウらくるをんこふ



一丈巻
十二



信俊
左門
三

や獲りのあぶりと。例に釣竿をお擔げ。
 小魚浜に出るが。あかり風雨にげりれば。
 釣竿やめくく。うんと。簾笠打つて。是
 も永代橋を通り。かりり。向ふは。ゆき。くけ
 じ。傘。くく。ひけ。ある。士。栲野。左衛門。まれば。日
 ごと。中。事。ぐ。は。ど。ら。な。れ。ば。新。合。も。面。働。と。
 豆。や。小。橋。は。下。り。ん。や。す。す。す。栲野。八。橋
 を。く。く。く。あ。る。あ。る。行。ち。ぐ。ひ。さ。め。何。一。人。

刀根十郎橋板に。す。と。と。と。ア。く。持。つ。釣。竿
 栲野。が。傘。は。は。は。あ。あ。あ。赤。や。ぐ。く。竿。の。先
 左衛門。が。眉。え。つ。つ。と。と。と。栲野。是。は。と。云。さ。ぬ。
 其。竹。を。ま。と。と。取。刀。根。ハ。は。は。あ。あ。あ。ひ。の。の
 と。も。の。の。び。の。の。と。す。れ。ば。栲野。大。は。怒。り。の。怒。
 外。奴。は。と。釣。竿。つ。ん。ど。引。り。と。刀。根。も
 あり。う。ら。ま。さ。り。新。合。ハ。刀。根。履。き。す。や。
 後。身。が。持。つ。釣。竿。家。え。ん。ん。あ。あ。あ。か。く

疵付くまに一言此のうだふまておすこと
まふらぬがごとく刀根ハ大の眼をこころ
あつて虫頭を結ぶこと悪くするは
不覺を少くせんとする 格野左衛門何のたぢ
けの言葉をかきまづることとゆへんは格野
活とせし立刀根が刀の備えうとぬく曰はれ
信俊武士の額に血をまぎし一言此咤だふまて
かきまぬこと悪口はひいけ其儘にうへん

と八人の道にもあつてあつていまうびやと言
葉すうぐいしに放るハ刀根是を聞て大
憤逆して蓑笠をうふがけ捨悪口ハ汝がふまて
登し人の乃に事あつてハ畜生にやうふおぼ
し武士あり子簡あつてと抜手をもえぬ
おれは格野ハすのさび様あつて是は受あつ
刀根ハひらくま二つとおぼを左衛門き
まぬこと合せ是駄ぬくことあつては

ちのしと切ひやぶ刀根も手練の達者なり
格登ハ軍ゆら名譽此切者互におとす才我ひ
しのが刀根がつらつらあふむ刀格登ハ力をう
すくえつらつが運の元は格登左衛門足駄のは
あをぬけとされそつらつらあふむたが終くと得と
すく十郎附入る者先より拍板けけ切きけ
あつはしりの左衛門例へてあつらつらあふむ
あつらつらあふむ人のうぬると足駄やにあつらつらあふむ

はしてあつらつらあふむはしつらあふむは今日
けつらあつらあふむ約竿格登がえん人にあつらつらあふむ
は幸と口論を仕のけつらあふむに切あつらあふむ日頃の
替憤けつらあふむとつらあふむ此將軍一聞あつらあふむ
は怒あつらあふむ唯置あつらあふむ又鎌倉にわつらあふむ
も彼が門弟あつらあふむとつらあふむと軍バ仇せんあつらあふむ
のうつらあふむ所全此所を立退んあつらあふむとあつらあふむ
決し妻子あつらあふむ密し門友に告し行方あつらあふむ

成にけり

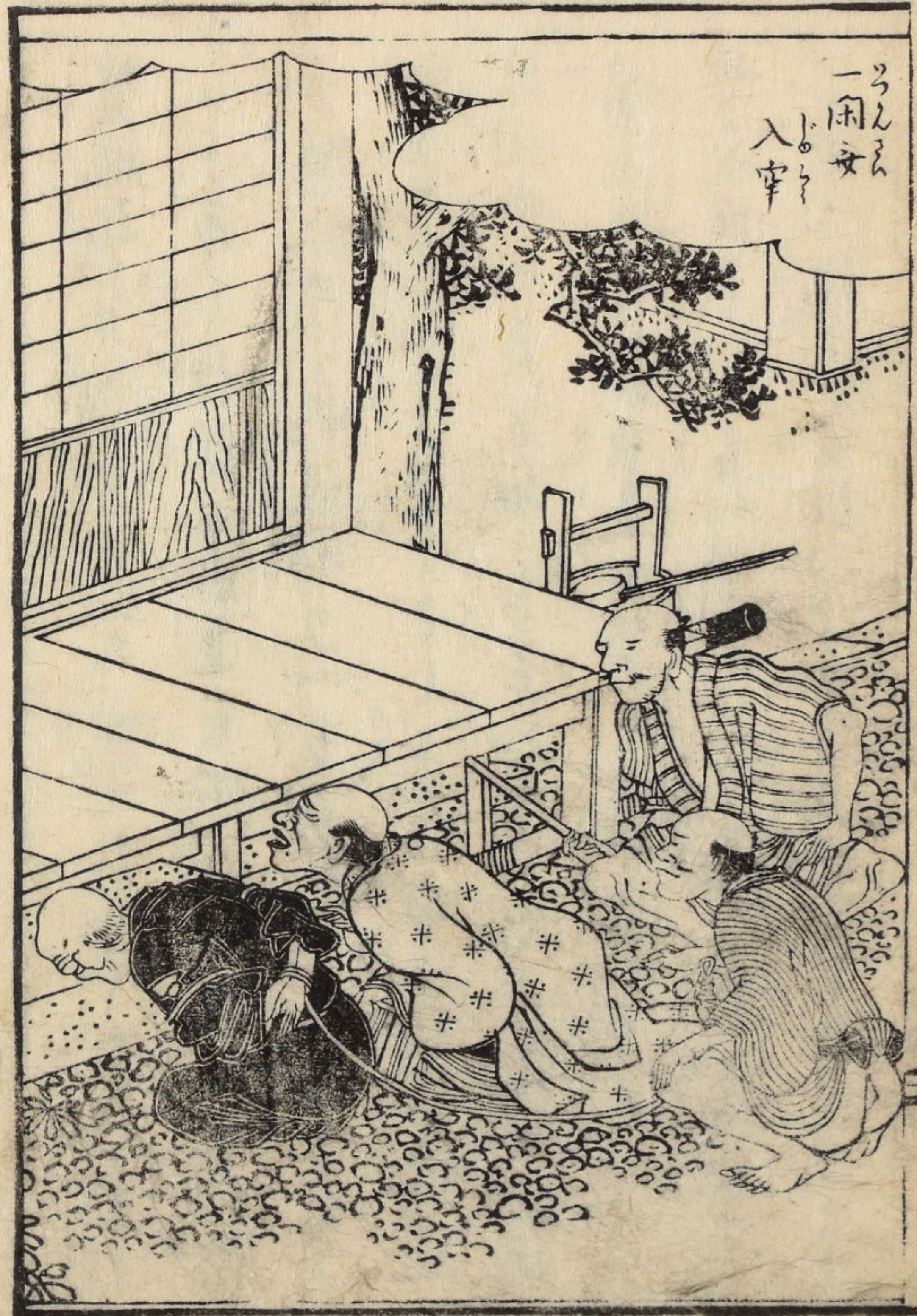
三編 榎野家民間落条 并一雨亦因条

諸も榎野左衛門と武道の譽名をくして教人の
師範をりしに運命ありしや刀根十郎が此
乃の紐りうとうとくれば時の將軍義勝公此由
を軍にめされ種く虐しありしとども左
衛門の息絶信俊を逐電せし事あれば外に
づしものもたなく其是罪わらぶとくれば喧嘩

両好がうに制すとあれば刀根十郎が後子没收
仰つて榎野榎野も断絶にむらびくれば家
中れ悲傷たうとあらぶとども又の人も
すづきやうなをわらぶとて是より民間にぞる
下野州榎野郡織田の里に蟄居しつゝも
室や朝に榮ゆらぶおろしとて世の在る
とくはあがら徳長刀に引くしとて鋤鋤りて
の業いと是非とあらば成る事あるとて去程

に左衛門が父一團富ハ七旬にちうく。左衛門が妻
を佳夜やうく三十年たがず男子二人あり兄と
敏太郎とよふく十二歳才ハ小治郎とく九才
にありまはれが初より武術軍学をまへつら
父横死の後ハ民間小下るといども俱に天をい
とくうがた父の仇を討さんと一團富の武の
道をまげき。其成長を待たざる近來不作
つる。殊更耕作の乃に味なれ田畑も後

質地お入あこゆら乃煙もたぐくあれはたの
のく年々租税の未進も滞ぬれハ國の守り懸
令應にめられ。紅ゆの上多くは未進おまわ
ばとく曲るあつとて。多し。一團富ハ逐
に囚獄の力とせうありに。あつ。あつ。あつ。
あにのうは佳夜女ハ大又驚くとかあ。は
やおはくもまらう。向く武士の。財落。魂
はとく。總の金につら。夏目を。見。く。ま。



一之巻
十八
入
字

本意ありき。けしきよく黄金のつる
あつねが二閑富の艱苦をすくひまらなりあり
がし。ややのくたさんとおもひれ。女子どもの
も腹よくハ一金の女覺ともあつたれば妻佳夜
おもしろけり。かろく来ゆとも宿世の約束と申
好む。眼蓋も男一閑富乃雅義を娘の力と
し。余所に看も乃にありげと多端に業
にらもくも。相談するとも人少くハあつた。

あり。懇切ある人との長を語れば其人の云男子二人
あれ。兄を内に置弟ハつと他家お属の男あり。最
早年と十二女にあれ。然るつとも後ありと頑童
小賣つともり。母ハ是を軍と等く
赤敷ゾ。因果の在るは云。好つて夫の悲
だも復にかひある。兒子ハ幼女とつひ。其中
強の年貢。未進ゆ。男の銀難とつひ。おれ。依
救ん乃。小治郎を結し。勤ま公に身を志

づえんするのふ使やふ。年々もはぬに人の慰
りのと来るの一向や。やと来る。泪瀧津瀬の
苦好る涙わくあつぬ。使もいと哀あめ。款も
程もいや中々。胃一雨高の辛苦を救便も
あけき。いと。遂人。にすめられく。小治と
售約束。す。来。に。

四編 小治郎售条 并 皎太郎落髮条

茲に駿州清見の關の紫金膏。古一伯良が腰子

一羽衣をわく。も。松の脂をく。とけく。三穗此浦
波に流る。煉出。始はく。御免。臆の念も
り。即座あれ。旅客の求め。中流の瓢。千金を惜
まぬ。ふ。店娘。雲。山。今。天。より
人を憐。世の寤を。う。其。河。本。身。
然。所。に。何。頃。より。義。童。を。見。世。の。守。に。置。ま。れ。ハ
性。還。の。草。卧。足。も。血。も。内。を。縁。も。に。る。め。さ。せ
んと。教。の。金。を。出。く。大。く。と。禿。な。れ。求。め。ち。は。は。と。や

さうや茲には一か條難義おれまじりの内と
おりの紫金膏の店へ泪とりの遣へらる。直夜
俊太郎に向くつやうに。弟小治郎と勤奉公と
も。めづるも。男を赦ん為め。其上は。い
精出たり。其の中。八時。其も。成。又小治郎
の年。四五歳。あり。あれ。其陰。を。矢。の。額
くめ。な。お。子。お。持。ひ。今。の。あ。ん。ご。ハ。サ。カ
が。り。少。少。成。ぬ。づ。し。の。好。う。は。あ。ん。ど。ま。あ。と。



母ハををれ是と。おのふも。いと。ふ。は。あ。り。か。く。て
小治郎の身代五十金をとり。直に官所へ持
り。滞り。未。進。な。原。し。男。一。閑。油。を。つ。き。ゆ。り
け。ら。ぶ。と。窮。困。の。心。配。の。上。に。囚。獄。を。い。ま。し。孫
又。老。人。と。し。ひ。艱。苦。の。中。を。も。娘。や。孫。子。の。子。を
案。じ。煩。く。あ。り。が。小。治。郎。を。售。く。其。身。代。に
く。囚。牢。を。免。と。し。と。も。程。好。病。に。臥。し。今。ハ
一粒の食も進まじ。次第に。ま。く。あ。り。娘。佳。夜。ハ

晝夜をを盡し介抱し。医療をを盡しし之
ども其志を以て墓間の風に流るる常耶と
務に振ぬ。佳夜皎太郎ハ顔見合何の因果は此
やうにうらね眼難の在るが如く。胃脚免あわ
ふ。弟小治の弟此上をとお終ふ。かく皎を
も生長在上。夫左衛門の敵をうせ。われや
是とつら話ハ。皎と柱とを柱とを柱とを柱と
に何の如く。乃便がもあ。あつあ。お果は

し。年ゆの誰を信あ。あつあ。あつあ。あつあ。
神も佛もは。あつあ。あつあ。あつあ。
何れぞ。此命も何れ。あつあ。あつあ。あつあ。
井に身を投んと。あつあ。あつあ。あつあ。
誰をたのみ。あつあ。あつあ。あつあ。
道隣の人打。あつあ。あつあ。あつあ。
想や。あつあ。あつあ。あつあ。



ぢや。何とくも短き命をあらたき世に
命若くおとすもまた兄貴の子に
生長あらし。上つやふ幸をばんとおぼ
と。身はては死に。佳夜をえし。人の助力を以
一閑を葬り。七日の吊つと懇にふ。頼
寺飯空寺を補し。齋ふと進めわたり。母
かよ何とく仕り。心傷お積り。四轉晒乱し
はとくも。ぢにふれば。医者よ業と愧けし

どと。在卿おれば。素人より集り。然猶万金丹を
吞せけし。どと。其まゝ。更にあけ。終に黄泉の空
し。人とおありに。飯をば。今年や。く十
五歳に。米をうぐ。米の泪を汲出。泣きを。おの出
ぬ歎き。つらん。あふ。あふ。あふ。あふ。あふ。あふ。
の中。二の。棺を。送出。立木も。あけぬ。飯を
を。童心よ。身は。死に。この。重き。世に。か。く。る
も。た。く。も。泪。雨。と。め。ぐ。く。ね。と。風。情。あ。る。飯。空。寺。の

和尚とく皎きやう々々にむかひ向むかひひの前ぜん世ぜのごう業ごう報ほう此こゝ生まゝにおのれのくく免めんるる
るるいいとと精せいくく最さい度どに及々々べべ皎きやう々々ハは合が掌しやうノの終はつ
おおとと墨すゐのの衣いにに身みをを解とくく直ちかにに皈きん空くう寺じのの弟子でし
あるある先せん祖そ兩りやう親しん菩ぼ提だいののるる後ご懇こんにに吊たりりとと釋しやく門もん
少せう身み入いにに々々行かうくく祖そ又また一いつ閑かんとと病びやう死し母ぼのの急きゆう死し乃なびび
ああとと僧そうとと朱しゆ一いつ客きやく子し委い細さいノの書しよままつつととめめ駿せん州しゆ等とう
小こ治ち郎らうくくとと生なまりりおおととああららはは

画本復讐言放下僧卷之上 終

